

柳 東弦 (リュウ ドンヒョン)

韓国出身

筑波大学 人間総合科学研究科体育学専攻 博士課程

【文武両道】

日本に留学して筑波大学大学院生として研究している私は、筑波大学の先生から文武両道の重要性について指導を受けている。文武両道とは「文事と武事、学芸と武芸、その両道に努め、優れていることを指す語。求道的な評価にも用いられる語である。変わって、現代では勉学と運動（スポーツ）の両面に優れた人物に対しても用いられる」と Weblio 辞書で書かれている。文武両道の意味について理解した私は、韓国で剣道選手として活躍していた時を振り返ってみた。その結果、韓国で剣道選手として活躍していた私は、主に運動を中心とした生活を行っていたことを気づいた。例えば、私が高校生の際に実施した一日の運動スケジュールは表 1 の通りである。

表1 高校生の運動スケジュール

| | |
|-------------|----------|
| 6:00~7:00 | ランニング |
| 10:00~12:00 | 午前運動 |
| 15:00~18:00 | 午後運動 |
| 19:30~21:00 | 夜間運動 |
| 21:30~22:30 | 個人運動(道場) |
| 23:00~24:00 | 筋トレ |

6時から7時までは私の家の周りにある公園でランニングをした。ランニングが終わった以降は朝ご飯を食べて学校に向かった。学校では午前・午後・夜間運動として剣道を行い、21時30分か

らは私が初めて剣道を学んだ道場に行って師範と一緒に稽古をした。その以降はジムに行って筋トレを実施した。このように、高校生の時の私は勉強よりも主に運動を中心とした生活を行っていた。その理由に関しては二つが存在している。一つ目は、私の目標は主に大会に出場して入賞することに焦点が当たっていたためである。そして、二つ目は、韓国の学校体育は主にトップアスリートの養成やメダル獲得に焦点が当たっていたためである。例えば、ある学校内で設けられていた運動部で継続的にメダルを獲得した履歴がないと、その運動部はなくなってしまう場合が多く存在している。運動部一つがなくなってしまうと、監督の職場の消失、学生の進路の問題、選手人口の減少など、様々な問題が生じてくる。そのため、各学校の運動部の歴史を引き続いていくためには、学生選手の運動量を増加させて大会でメダルを獲得する必要がある。このことより、学生選手は正規課程の授業を受ける時間の代わりに運動をしなければならないことが過去の韓国運動界の実情であった。しかし、現在の韓国の学校体育では、学生選手の学習権の保障の制度が施行されるようになったことを契機に、学生選手が大会に出場するためには一定の学業成績が求められており、もし、一定の学業成績の未達の学生選手は大会に出場することができなくなる。このことで、現在の韓国の学生選手は運動のみならず勉強も重要視している。上記のように、私の目標の達成や韓国の学校体育のシステムの影響で

勉強よりも運動を中心とした生活をしていました。しかし、日本に留学をすることを契機に、運動のみならず勉強も重要視する姿勢、いわゆる文武両道の重要性について感じられるようになった。このことにより、世の中を見る視野が広がったことだけでなく、専門知識も備えられるようになった。また、諸国のの人々とコミュニケーションが深まった結果、異文化に対する理解度も向上されるようになったと考えられる。さらに、韓国の剣道スタイルのみならず日本の剣道スタイルも学べるようになった。

今後、文武両道を兼備した研究者になれるように、一生懸命に運動のみならず勉強に精進していきたい。

【奨学生時期中にできたこと・将来計画】

2021 年度から坂口国際育英奨学財団の奨学生となった私は、貴重な奨学金を活用しつつ研究活動を行うことができるようになりました。感謝申し上げます。

2021 年度の坂口国際育英奨学財団では、奨学生のために様々な行事を開催していただきました。例えば、歌舞伎鑑賞教室や第 65 回日本赤十字社献血チャリティ・コンサートの見学、オンラインでの交流会などを実施していただきました。坂口国際育英奨学財団の行事を通して、日本留学生活の中で一人では経験することが難しいことを多く経験することができるようになりました。日本固有の演劇である歌舞伎鑑賞教室や第 65 回日本赤十字社献血チャリティ・コンサートの見学を通して、日本の文化を学び、音楽の力を直感することができるようになりました。そして、「平和」というテーマとして開催されたオンライン交流会を通し

ては、坂口国際育英奨学財団の奨学生たちとコミュニケーションを交わし、各専門分野からみた平和の意味について学ぶことができるようになりました。

坂口国際育英奨学財団の奨学生時期中には、日韓剣道史資料を収集するために、東京都にある講道館柔道資料館・図書館や全日本剣道連盟の事務局(情報安全部門)のみならず秩父市にある高野佐三郎遺跡(明信館本館)や秩父市教育委員会文化財保護課に現地調査を行いました。現地調査を通して貴重な史資料を収集したことだけでなく、日本各地域の特徴や剣道関連団体の史資料の管理・保存方法などについて学ぶことができるようになった。そして、2021 年 6 月 19 日には、第 10 回体育史学会(オンライン開催)で「日本植民地下朝鮮における学校剣道の普及に関する研究」というテーマとして口頭発表を行いました。その時、先生の方々から質問や教えるを受けるようになったことを契機に、私の研究が一步前進することができるようになったと考えております。このように、坂口国際育英奨学財団の奨学生時期中にできたことは、研究活動(現地調査 3 回、学会発表 1 回)や日本の文化を学ぶなど、より良い日本留学経験を積むことができました。改めて感謝申し上げます。

最終的な将来計画は、筑波大学大学院の博士後期課程を修了した以降、韓国に帰国して大学教員として勤めつつ、学生を育成することを目指しております。大学教員として自国の体育史分野の発展のために尽くしていきたいと考えております。さらに、日韓のみならず諸外国と研究交流しながら国際研究の発展に貢献できる学者になりたいと望んでおります。そして、日韓剣道界の架け橋

としても活躍していきたいと考えております。上記の目標を叶えるために、世の中を新たな視点からみる力、様々な思考力、リーダーシップ、自分の専門分野について批判的な観点からみる能力を養っております。しかし、現在の私には不十分なところが多く存在しているため、一所懸命に自己開発をしていきたいと考えております。

以上